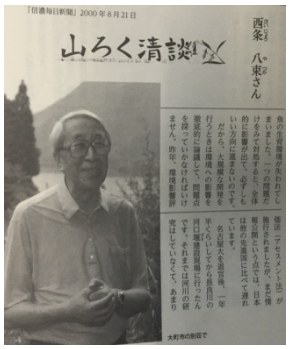
西條八束先生の「思い出」

今日で西條八束先生が亡くなって 10 年になる。久しぶりに先生の『父・西條八十の横顔』を手にとった。本書は長女・八峯さんが編集して、2011 年 7 月に風媒社から出版された。写真は本書冒頭に掲載された、2006 年 8 月 12 日に先生が描かれた「朝のはんの木」。

編者そえがきから―倒れる数日前まで、いつもと同じように会合に出席し、語学講座に通い、ワインを楽しみ、自分のスタイルで歩きとおした父西條八束でした。名古屋の家のパソコンには、おびただしい量の文章が遺されていました。十年以上にわたって何度も書き改められた『父西條八十』の草稿です。「僕は科学者だから」

常に実証的でありたいと願った父らしく、集めた資料から、なんとか大きな流れを作り出そうとしたさまざまな試みの跡が偲ばれました。湖水のフィールドワークでデータを集め、論文を書くように。

あとがきに代えてから―2007 年寒露の朝、香りはじめた金木犀の枝を父・八束の枕元に運びました。茜色の夕空に旅立つ父を見送る日となりました。その頃、完成を心で約束した本です。以来 3 年半。私たちは千年に一度と言われる災禍の中に身を置くことになりました。大地震と津波、原子力発電所のいつまでも終わらない事態。このような今こそ、大正昭和の乱世を生き抜いたひとびとの記憶は、悲しみに足元をすくわれぬ力を私たちに与えてくれるものと信じます。祖父・八十は口癖のように言いました。「芸術は泥沼に咲く蓮の花なんだよ」。



「信濃毎日新聞」2000年8月21日

山ろく清談

西条八束さん

地球サミット後の環境がかわりでしょうか。環境問題が大きくなってきて、多くの人が、ものを考えるとき、対応するとき、客観的に影響が出て、必ずしもいい方向に進まないのです。だから、大規模な開発を行うときは環境への影響を最小限にとどめるように、多様でいかなければいけません。昨年、環境影響評価法（アセスメント法）が発効されましたが、実際に開いてみると、日本は他の先進国に比べて遅れています。

あの屋久島大水田開発、一年半くらいしかたたない時点で、自然にしっかりと根付いたのです。それまでは河川の研究はしていなくて、あまり

大町市の別荘で

写真下は本書掲載の信濃毎日新聞 2000 年 8 月 21 日「大町市の別荘で」。西條先生は写真のように、じつに温かな感じで、多くの人から慕われた。その一方で、自然環境の破壊に対して、科学者として厳しく立ち向かわれた。

2001 年 2 月 4 日に先生直筆の手紙を頂戴した。じつは前日、朝日新聞「声」に私の投書が掲載され、それに応えたものであった。すぐさまの丁重な手紙に感動したことを覚えている。投書の内容は、中部空港「前島」埋め立てを批判したものだ。先生は「私が感じていたことを、それ以上に具体的な数字をあげてお書きいただき、本当にうれしく、ありがたく感じました」と。先生の手紙は、私にとって大きな励ましとなった。

（2017 年 10 月 9 日）